

## 第12回県政知事懇談

# 湯崎英彦の宝さがし

テーマ【挑戦そして実現！引き出せ広島県の「底力」】

と き 平成22年8月7日（土）  
ところ 三次市コミュニティセンター  
1F大ホール

広 島 県

## 目 次

頁

開 会 .....	1
懇 談 .....	2
自由討論 .....	39
閉 会 .....	46

## 開 会

(知事(湯崎))

皆様、こんにちは。ようこそいらっしゃいました。ありがとうございます。

今日はこの県政知事懇談「湯崎英彦の宝さがし」に御参加いただきましてありがとうございます。

まず、今日は懇談会のメンバーとして10名の方をお願いしておりますけれども、土曜日で貴重なお休みの日ではないかと思うのですが、お忙しいところ、本当にお時間をいただきましてありがとうございます。

また、傍聴の方も、夏休みのせっかくの天気の良い土曜日でいろいろなことができるころ、こうやってお集まりいただきまして本当にありがとうございます。今日は傍聴の方が特にたくさんいらっしゃるようで、すごいなと思っております。

始める前に、少々私のほうからこの懇談会の趣旨を御説明したいと思います。

まず、私が昨年11月に就任してすぐから、各市町でこうやって10人ぐらいの方々と直接懇談をさせていただくという機会をいただいております。1年間かけて、全23の市町があるのですけれども、そこを回っていく予定にしております。

この目的は、我々県が直接住民の方の御意見を聞くということは少なく、市や町といった行政機関といろいろと仕事をすることが多いのですけれども、やはり実際に住民の方々のいろいろなお考えになっていることを直接お伺いするというのも非常に大事だと思っております。今日は市長もいらっしゃるのですけれども、ある意味でいうとフィルターのかからないお話をお聞かせいただくということが目的でございます。

それをどうするのかというと、個々の課題について、いろいろ出てくることあるのですけれども、課題について具体的に解決を図っていきますというのではなくて、むしろいいこと、悪いこと、普段お考えのことがあると思うので、それをお伺いして、貯めていくことによって、県政を考えていく上での基盤づくりにしていきたいと思っている次第です。

つまり、個々の御意見というのはいろいろあるのですけれども、それを23市町続けていきますと200~300人ぐらいの方の御意見をお伺いできるので、だんだんと貯めていくと、今日は味噌のお話もお伺いしたのですが、味噌樽のように熟成してきて、いいものが、いい基盤ができていくのではないかと考えています。そういうものを全体として、総体として県政に生かしていきたいというのがこの会についての私の考えでございます。

行政のフィルターを通さないということで、そちらはどうなのかというと、そちらもちゃんとやっております。三次では既に市長との懇談会もやらせていただいております。これも23市町やっております。こちらについても、具体的な課題もあるのですけれども、それ以外の、普段頭の中の大宗を占めていることを教えていただいて、どういうふうに行

のかじ取りをするのか、知った上で県政を組み立てていく。

この直接住民の方との懇談と、市長、町長との対話ということを通じて、総体的にうれしい味噌づくりに励んでいるというところがございます。そういうことがこの会の趣旨であります。

もう一つ、私が県政の基本というふうに考えておりますことをお話しさせていただきたいと思うのですが、県というのは実は非常に大きなところであります。よく県が何かやる、あるいは私が知事として何かやるというお話があって、皆さんにも注目をいただいているのですが、実際には広島県という大きな県が動いていく、前に進んでいくためには、県庁とか私が1人で何かやって動くというものではないわけです。私はやっぱり市民の皆さんのパワーというのが一番大事ではないかと思っております。行政というのは、その力を後押ししていくというのが大きな役割なのではないか。旗を掲げるということもあると思うのですが、旗を掲げた上で、みんなが同じ方向に向かって走っていきえるようにするということが大事だと思っております。

今、そういうことで五つの挑戦というのを掲げて、経済活動あるいは暮らし分野ということで挑戦をしていこうと申し上げておまして、この挑戦というのも、今、なかなか厳しい時代にある中で、世の中を変えていくためには一定のリスクをとって、場合によっては失敗するかもしれないけれども、何かリスクをとってチャレンジしていかないと新しい地平は開けていかないのではないかと、そういうふうにも考えておまして、そういうつもりで今、県政を進めているところであります。

そういった中で、最初に戻るのですが、旗印を掲げるその旗印をどういうふうにするか、あるいは、市民の皆さんをどういうふうの後押ししていくかというようなことで、こういった味噌樽の中からおいしいものができるのではないかと考えている次第であります。

## 懇 談

(知 事)

それでは、早速ですが始めさせていただきます。まず、お一人5分ぐらい時間をとらせていただいて、私との多少やりとりも含めて会を進めさせていただきます。大体1時間半ぐらいお一人ずつの時間に使いまして、残り30分になるのですが、幾つかのテーマになるかもしれませんが、全員で意見交換を進めたいと思います。大体3時半ぐらいに終了する予定にしておりますので、少々長いですがお付き合いのほどよろしく願います。

それでは、早速、国広さんからお願いできますか。

(国 広)

私，国広と申します。よろしくお願ひします。

小学生の娘と，午前中に見ていただいた保育所に息子がおります。

(知 事)

さっきいらっしゃいましたか。

(国 広)

はい。いました。

主人の両親と同居しております，毎日にぎやかに過ごしております。

仕事は，地元自治会の事務をさせていただいております。自治会で子育てサークルのお手伝いをさせていただいたり，学校と自治会が主になって，地元の農家さんの野菜を学校給食に地産地消で入れさせていただいております，そこのお手伝いをさせていただいております。

保護者としては，保護者会の役員もさせていただいて，子どもを通じて保護者同士が仲良くなってつながっていったらいいなと思って，日々頑張らせていただいております。

今回，困っていることは何かというお話をいただいたのですが，三次市は子育て日本一を目指してとても頑張っているのだから，あまり困ったことがないので，申し上げることがないような形なのではけれども。

(知 事)

すばらしいですね。

(国 広)

第三子の保育料の無料化だったり，小児科の 24 時間の受け入れだったり，かなり手厚くしていただいておりますので，本行政のハード面においてはすごい充実して，ありがとうございます。

(知 事)

今日の保育園もすごくいい施設でしたね。

(国 広)

はい。いろいろと時間をかけて検討させていただいて，意見交換会なども何度もしていただいております。

(知 事)

そうなのですか。そのつくる途中でですか。

(国 広)

つくる段階からいろいろと行政と社会、地域を含めてお話をさせていただきました。

(知 事)

そうですね。私も県政の中で経験しているが、行政は、計画というか何か決めたら、それを説得するという事しかなくて、途中で相談するというのがときどき抜けていることがあるのですが、そんなことはなく。

(国 広)

そうですね。かなりじっくりと時間をかけてしていただきました。

(知 事)

今、子育てについて幾つか、第三子の医療費無料化とか、小児科 24 時間とか、例を出されましたが、一番これが助かっている、これがいいというのは、国広さんの御意見でも結構ですし、保護者会の皆さんの広い御意見でも結構なのですけれども、どういったところが一番助かっていますか。

(国 広)

いろいろなことを考えてくださっていて、今、夜間保育なども考えていただいているようです。ただ、夜間保育を考える機会が以前この保育所を建てる段階であったのですが、そのときに別の保護者のお母さんだったのですが、今まで保育所のこの時間があるので、職場の方の協力によって定時に近い時間で帰らせてもらっていたものが、夜間保育が始まると、逆にそれがあるからなかなか定時に帰れないのではないかということをおっしゃったのは事実です。でも、子どもを育てる上においては、公園とか病院なども充実しているので、よそから里帰りなどをされるお母さんが、24 時間の小児科の病院があるのは助かるんですというのは何度も聞いたことはあります。

(知 事)

総合的にいろいろやっているということが大事なのかもしれませんね。

今、県でも子育てということで大分力を入れてやっているものですから、ちょっとお伺いさせていただきました。ありがとうございました。

(国 広)

ありがとうございました。

(知 事)

それでは、浜井さん、お願いします。

(浜 井)

浜井といいます。妻と子どもが4人おります。4人目は純粋な三次っ子でありまして、生まれて4ヵ月目です。

三次市三良坂町にIターンという形で入ったのですけれども、一昨年秋まで広島市の住宅地で、私の実家に暮らしながら会社員をしておりましたが、縁がありまして、三次市に、空き家バンクという制度を利用して家を紹介していただいて、そこがすごく気に入ったものですから、思い切ってこちらに移ってきたという感じであります。

私の仕事は農業で、以前からやってみたいなという気持ちがあったのですが、無農薬栽培ということで、旬の野菜の詰め合わせを宅配をするというスタイルで、去年の春から始めました。何とか軌道に乗ってきたという状況です。

私は全くのよそ者で入ってきているだけに、できるだけ地域に溶け込んでいきたいという思いはあり、消防団や、地域の営農集団など、そういったものにも入れていただいて、地域の活動に参加しています。

この間大雨のとき、実際に消防団の出動がかかりまして、私も日中家にいるものから駆けつけたのですが、床下浸水した家に土嚢を積んだり、土砂崩れの土砂を除いたりというようなことで実際に貢献できたりして、だんだん地域の住民になりつつあるという感じがしております。

(知 事)

ありがとうございます。浜井さんから御覧になって、広島にはない三次のよさというか、あるいは、地域のよさというのはどんなところがありますか。

(浜 井)

いろいろあるのですが、何といても、皆さん人がいいというのが第一印象です。面倒見のいい方が多い。

(知 事)

やっぱり地域のつながりを大事にされているという印象ですか。

(浜 井)

そうですね。ですから、去年の秋に、私は初めて稲刈りを手刈りでやったのですが、慣れないものだからうまくいかないで、周りの大先輩が見るに見かねて御指導に来てくれました。

(知 事)

大先輩というのは、かなり年配の。

(浜 井)

もう 80 代の大先輩です。そういう方が、鎌を持ったらしやきんとして、ちゃっちゃっ、ちゃっちゃっ、こうやってやるんだということで教えていただいたのですが、本当に助けられながら何とか暮らせているなという感じがあります。

(知 事)

それは、やっぱり地域の消防団などやられて、地域に溶け込み始めているというのがあるのですか。

(浜 井)

そうです。お互い様と言われるところはあるのかなと思っています。というのは、自分の周りを見渡しても、70代、80代の方が一番多くて、60代の方はまだ現役ばりばりで働かれるという中で、私は30代ですから、むちゃくちゃ若いじゃん、働いてもらいますよみたいな感じで見られているのです。実際、寝たきりのお家の方がベッドから落ちたので、ちょっと助けてくれんかということで声がかかって、助けに行ったらよいしょとベッドにあげたりすることもあったのですが、たったそういったことなのかもしれませんが、日中、その地域に働き盛りの人がいるというだけでも、貢献ということができていると言えるのではないかと。その反面、おいしいものができたからどうぞという感じでいただいたり、本当にお世話になっており、少しでもそういう形で地域のお役に立ちたいなと思っております。

(知 事)

ありがとうございます。相身互いというか、そういう地域のつながりの中で、みんなが助け合っているというところが、それが都市部にはほとんどないですね。もちろん地域の自治会などありますけれども、そういう形とは雰囲気は違いますね。なるほど。ありがとうございます。

それでは、お隣の三好さん、三次の三好さん、字がちょっと違うのですけれども、よろしくをお願いします。

(三 好)

お願いします。布野から来ました三好と言います。

(知 事)

布野ですね。

(三 好)

布野です。ここの名簿にほとんど書いてあるのですけれども、ずっと布野から出ることなく、イラストレーター、絵描きとして活動しています。

主な活動は、月に1回道の駅の中にある林産館の夢の市というバザーの中で似顔絵を描いたり、グッズや、しおり、ポストカードを売ったりして盛り上げるように頑張っています。前回の夢の市のときから、ちょっとゴスロリの格好をしてやっています。

(知 事)

ゴスロリ、多分分からない人がほとんどではないかと思うので、ちょっと解説してもらっていいですか。

(三 好)

ちょっとスカートをふんわりさせた感じの服なのですけれども、全体的にお姫様みたいな感じの服装で、派手な衣装ということで注目を集めています。ゆめランドの中はバイキングやアイスを売っている方と林産館の方とに分かれているのですけれども、どうも林産館のほうが暗いイメージがあり、そこを明るくしようと思って、ちょっとそういう格好で人を寄せるように工夫をしてみています。

(知 事)

なるほど。ちなみに、ゴスロリというのは、ゴシックロリータですよね。ゴシックロリータで、ゴシックですから、ゴシック建築の時代ぐらいの超お姫様みたいなイメージですよ。ね。

(三 好)

はい。

(知 事)

だから、コスプレとっていいのですか。

(三 好)

コスプレとはちょっと違うのですけれども。

(知 事)

かなり目立ちませんか。

(三 好)

ちょっと写真を撮らせてくださいということもありますが、目立つのが目的でやっているんで、写真もどうぞということで気軽に。

(知 事)

そうですね。受けていますか。

(三 好)

前は結構話しかけてもらったり、気軽な感じでふれあえたのでよかったのではないかと思います。

(知 事)

そうですね。三好さんはずっと地元において、そうやって地元の盛り上げを助けたというふうに活動していらっしゃるのですけれども、若い人はどこか都会に出て行くとか、よそへ出ていくとか、目立ちたいとか、目立ちたくて行っているわけではないと思うのですが、新しい刺激を求めて行ってしまうじゃないですか。三好さんが地元で、そうやって地元を盛り上げていきたいというふうに感じていらっしゃるもとのこととか、理由はどういうところにあるのでしょうか。

(三 好)

実は、本当のことを言うと、もっと市内のほうに引っ越してやりたいというのはあるのですけれども、昔は林産館も活気づいていて、毎日開放して、いろいろ物を売ったりしていたのですが、ここ数年の間にそれが完全に閉まってしまっていた。今、何とか週に1回日曜日だけ開くように頑張っておられるということで、ずっと布野にいたにもかかわらず、そういうの知らなかったということや、昔よく遊んでもらっていたところが閉まっているというのにショックを受けて、どうにか、自分も絵描きをしているということで、何か

お手伝いをできたらやりたいな、地域にできれば残ってやっていきたいなと思うようになりました。

(知 事)

布野が大好きなのですね。

(三 好)

はい。好きですね。

(知 事)

布野のいいところを三つ教えてもらっていいですか。

(三 好)

自分の家があるのはちょっと山の上で、田舎のさらに田舎のほうになるのですけれども、とにかく山と田んぼと畑しかないのですが、それがすごいきれいで、虫の声や鳥の声がずっと聞こえるような、車の音がほとんどしないということと、あとは民話というか、神話のような昔話がいろいろと残っているので、それがおもしろいなと思っています。

(知 事)

それは布野の昔話が残っているのですか。

(三 好)

はい。布野の昔話です。

(知 事)

それはずっと語り継がれてきたのですか。

(三 好)

そうです。いろいろ文献が残っているみたいで。

(知 事)

なるほど。そういうところに愛着を感じている。

(三 好)

はい。育ってきたところなので。

(知 事)

小さいころからお世話になっていた林産館ということですが、林産館で遊んでいたというわけではないですね。

(三 好)

林産館のお祭りが月に4回あるのですが、そのときにそこへ入ってみると、いろいろ木工作業とかをされていた。

(知 事)

では、実際にそこで遊んでいたというか、楽しんでいたのが、少し寂しくなっているのを見ていると、もういてもたってもいられない。私も何とかしたいと。

(三 好)

また昔みたいに毎日開放されるようになればいいなと思っています。

(知 事)

ちなみに、イラストレーターというのは、どんなイラストを描いていらっしゃるのですか。

(三 好)

コミック系の漫画に使われているような絵柄なのですが、それで、小説の挿絵などを描けるようになればいいなと思っており、まだ描いてはいないのですが、個展を開かせてもらったり、いろいろ、グッズを販売させてもらったりして活動しています。

(知 事)

なるほど。でも、そういう三好さんみたいに郷土愛を持っている人がたくさん増えると、本当にすごくよくなりますよね。ありがとうございます。

それでは、児玉さん、お願いいたします。

(児 玉)

児玉と申します。三和町で平成4年に、高原安瀬平乳業というヨーグルトの製造を始めまして、今日まで18年間ほど勤めてまいりました。地元の皆さんの支持もいただき、三次市の市場から、広島市場、県下の市場から、皆さんにかわいがっていただいて、いま現在、アンデルセンさんのブランドとして全店に当社のヨーグルトを納品させていただいて

います。

(知 事)

アンデルセンブランドで出ているのですか。

(児 玉)

はい。アンデルセンさんの名前でヒュッグというタイトルで、心地よいという意味らしいのですが、ヒュッグというシリーズの中で山のヨーグルトという名前で発売をさせていただいています。たまたま昨年三次市から広島大学の産学地域連携ということで、いわゆる事業者向けに技術を提供して、新商品の開発につなげるという形のものですが、杉山教授のもとで植物乳酸菌を開発されており、それを当社のほうでやってみないかというお誘いをいただきました。それで杉山プロジェクトの皆さんと我々の若い製造スタッフとで半年あまりになりますけれども技術研修をいただいて、やっと4月に商品としてこれならいいだろうということで発売をさせていただきました。本来であれば、動物乳酸菌の場合は乳酸菌と牛乳だけでヨーグルトができるわけですが、植物の場合は牛乳だけではできないのです。ですから、我々が始めるまでに野村乳業さんというのが広島にありまして、そちらでは乳酸菌を、培地として酒のかすが使われて、それで牛乳と混ぜてヨーグルトをつくる。我々の場合は新しい開発でパイナップルを使って、それを培地として乳酸菌とパイナップルと牛乳を使ってヨーグルトをつくる。このプロセスでやったらどうかという御提案をいただいて、そういった形で発売をしたわけですが、広島市場はもちろんですが、たまたま東京の高島屋の新宿店で国立大学の催事があり、その中に広島大学も出展するというので、我々も商品を持って行って、そこで販売をさせていただいた。そのことで現在、高島屋の日本橋の本店なのですけれども、そこで植物のヨーグルトは定番で販売していただいています。

(知 事)

そうですか。売れ行きはいかがですか。

(児 玉)

県外の第1号で、売れ行きは、1店舗ですから、そんなにたまげたことはないのですが、ただリピーターの方がいらっしゃるということで、非常に評価していただいています。

ただ、問題として、ヨーグルトというのは、何々に効果がありますよとか、我々はそういうことがなかなか伝えられないのがあります。

(知 事)

法律の規制の問題ですね。

(児 玉)

そういうことです。要するに、コンプライアンスの問題で、機能性を訴えることができないということです。ですから、絞った牛乳を使ったり、あるいは、植物乳酸菌を使ったり、それから、乳酸菌数がこれこれありますよという程度のことしかできない。

ですから、本来であれば特定保健用食品など、そういう商品として認定を受けるためには、1アイテムに限定した場合に、やはり現在では5,000万円から1億円費用がかかる。

(知 事)

特保をとるためには、5,000万円から1億円かかる。

(児 玉)

そうです。これは、我々のような零細企業において到底できることでございませんし、結局、食品として機能性を訴えるということが、大手ではお茶でも何でもそうですが、訴えることができますけれども、なかなか我々にはそれができないというハードルがある。これを何とか市なり行政なりに対して、何かいい方法がないかということの一つをお願いしたい。

それは我々同じ製造業者においても、いろいろなところで機能性を持ったいい食材があると思うのですが、その意味では宝がそのまま埋もれてしまうということになるような気がしますので、何とかそういったことを考えてもらうことができないかということを感じています。

(知 事)

その5,000万円から1億円というのは、機能性を証明するために試験などでかかるのですか。

(児 玉)

もちろん臨床実験で、人材を確保して、それを1ヵ月間ずっと試験を行っていくということになれば、それも高額な費用になりますし、それをもとに検査をする費用もそれ相応にかかるということです。

(知 事)

なるほどね。そういうところにかかるわけですね。

(児 玉)

はい。ですから、我々は、朝絞った乳をそのままヨーグルトにしてつくりましたということの宣伝しかできない。今はそれでやっていますけれども、願わくば、本当にいい機能性があるものであれば、それも訴えることが商品としての価値をアピールできるのではないかというふうに思っています。

(知 事)

そうですね。今、訴えたい、本当はこんな機能があると思うのだけどというのは何ですか。

(児 玉)

例えば今、安瀬平乳業のすべてのヨーグルトはそうなのですけれども、100ccの容器で、一般のヨーグルトであれば100億の乳酸菌がありますが、我々がつくっているヨーグルトというのは1,500億あります。

(知 事)

100億が普通で1,500億、15倍ということですか。

(児 玉)

我々が1,500億、これはもう実際にデータとしてあるのですけれども、でも、これはそこまでしか我々は伝えられない。

(知 事)

アンデルセンに行けば買えるわけですね。

(児 玉)

はい。ですから、販売店においては、そこで一応評価はしていただいているわけですが、ただ、それが多ければどうなのだということになると、我々は伝えられないということなのです。ですから、本当にいいものがあって、多くのものが体に入れば、それなりの効果、効能というのがあるはずなのですけれども。

(知 事)

成長面など。

(児 玉)

当然もちろんそれもあると思います。でも、それは一般的に言えるだけであって、力強くいいですよということは、やはり問題があります。

(知 事)

どういう機能があるかということ自体も特定していかないといけないということですね。

(児 玉)

当然そうですね。そういうふう感じて、思っています。

(知 事)

分かりました。ちなみに、大変失礼なのですがけれども、18年前からそのヨーグルトづくりに取り組んでいらっしゃるということで、その前は。

(児 玉)

説明していなかったのですが、もともとは三和町で生まれて、親子1代で酪農をしておりました。酪農を10年間やって、それからこういった道に入りました。

(知 事)

そうなのですか。今、実は農商工連携などいろいろやっているのですがけれども、ある意味でいうと自然な流れですよ。生乳をつくられていて、そこに付加価値をつけていくというところで、当然つながったものをやられているということですよ。

(児 玉)

はい。

(知 事)

もともとの牛乳なり、生乳についても自信があったということですね。

(児 玉)

そうですね。牛乳については、本物の牛乳というか、一般の方には味わえないものを我々は生産をしておりましたので、牛乳のよさというのは十分分かっているつもりです。ですから、そのよさをなんとかアピールしたいというのでヨーグルトにしたわけですから、先ほど言いました菌数が多いというのは、やはり生乳を使ってつくるからそれだけの増殖効

果があるということも当然あるわけです。

(知 事)

ちなみに、ちょっと細かいお話を聞いて恐縮ですけれども、アンデルセンに出すようになって、生産量というのは追いついているのですか。

(児 玉)

一応、小さな工場ですけれども、基本的には 5,000 個とか 1 万個近くつくることは可能ですので、その意味では十分達成できるところでございます。

(知 事)

ありがとうございます。今、農業について、どうやって付加価値化を進めていくかということが課題になっていますし、県でも活性化計画というのをつくっているところなのです。ちょっと難しい言い方になりますけれども、付加価値といったときに、結局は、最初の素材のところからお客さんのところに届くまで、素材そのものが届く場合もあるし、別の形になる場合もあるし、流通に出ていくのか、あるいは、浜井さんのところは流通もやられているわけですね。直接に宅配で届けられるという、流通の付加価値をとっていくという考えと、加工することによって、加工部分での付加価値をとっていくという考え方で、いろいろあると思うのですけれども、強みをベースに、いい牛乳があるからいいヨーグルトができるという、強いものを伸ばしていくというお考えで付加価値を高めていくという、我々県でも目指そうとしているところの非常に好例を見せていただいているようで、大変心強いです。ありがとうございます。またいろいろ教えてください。

(児 玉)

はい。ありがとうございます。

(知 事)

それでは藤原さん、お願いいたします。

(藤 原)

三良坂から参りました藤原と申します。よろしく申し上げます。

今日は産業振興という分野でお声がけをいただいて来させていただきました。私のところは株式会社ライスファーム藤原という会社で、従業員 3 人と一緒にお米づくりをさせていただいております。

広島県は 65 歳以上の就農者、農業をする方の高齢化率というのは全国でもトップレベ

ルということで、お年寄りが多い。その中で耕作ができなくなった田んぼ，うちの場合は米づくりなので田んぼが主なのですけれども，できなくなった田んぼをお預かりして，それをうちで管理をして，農地を農地として維持するという仕事をさせていただいています。

今，お客さんが百数十軒で約 45ha をお預かりして，あと別に，作業受託という形で，料金設定等はまた別の形で 20 町，20ha を，田植えや稲刈りなどの仕事を受けさせていただいて，米づくりをしています。

できたお米は自分で販売というところに力を入れており，2 割は J A さんの系統へ出荷させていただいて，残りのお米を顔の見えるお米ということで，そこにもポスターがありますけれども，広島ブランドということで，安心・安全というか，つくった人の顔が見える安心なお米というところを PR しながら，業者さんとお付き合いをさせていただき，基本的にはできたお米を県内で流通という形，県民の方に食べていただくという形で取り組んでおります。

20 歳で就農しまして，米づくりで言うと 25 回，1 年に 1 作なものですから 25 回つくりましたけれども，年々お年寄りの方がリタイアをされて，つくれなくなった農地というのがどんどん出てきます。その中で広島県，特に集落法人とか，法人の企業参入とか，そういったところに力を入れられているわけですが，うちのほうも 2 年前に会社化をしました。それまでは藤原農場という個人の経営でしたけれども，アルバイトという形ではありましたが従業員が 3 人来ていましたので，その福利厚生も考えて 2 年前に会社化し，雇用の関係も充実させようということで，今，取り組んでいます。

#### （知 事）

今は社員さんになっているわけですね。

#### （藤 原）

はい。取組として，当然お米をつくるというところもあるのですが，先ほど言いましたように農地を荒らさずに守っていく。やはりこの中山間地域において，農地というのは宝物だと思うのです。当然子どもも宝物です。自分が今できることは何かと言えば，そこを何とか，自分が農業が好きだということもありましたけれども，できるのであれば，それを企業化して他産業に負けないものに農業をもっていこうということで，今，取組をしています。

今後考えていかなければいけないのは，やはり後継者づくりですね。私のところもまだ子どもが小学生なものですから，今のやっている仕事をやれというのは，まだまだ先のことで，するかどうか分かりません。先ほども三良坂の浜井さんがお話をされましたが，I ターンなり U ターンなりで結構農業をやりたいという方はいらっしゃるのです。三次も毎年 4～5 人，新規就農者という形で，お米づくりというのは少ないのですけれども，施

設園芸であるとか、果樹であるとか、そういったところで農業をやりたいということで帰られたりという方はいらっしゃるのですが、なかなか農業一本で家庭を養うというか、生計を立てるといのは普通の小さい経営では成り立たない。私どもの今のような規模になって、やっと従業員が抱えられるような状況ですから、知事にもお願いしたいのですけれども、そういった夢を持った方がおられるのをつぶすことのないように、育てていくような仕組みづくりを是非ともお願いしたい。

私のほうも、今、農協で青少年関係の役をしておりますので、地元の小学校なり、県内いろいろなところへ行って、バケツ稲や、米づくりについての話をしに出かけています。農業を当然知ってもらいたいというのもありますし、それをきっかけに、農業に夢を持って飛び込んで来る方が1人でもいらっしゃればということで、農業高校に出前授業とか、高校生の受け入れとか、農機具メーカーさんの実習の場であるとか、そういったところでうちで今できることをさせていただいております。

(知 事)

ありがとうございます。これはちょっとディープな質問で、今日は農業関係の方も多いので後でお聞きしたいところもあるのですけれども、それをあえて藤原さんに、お米をつくっておられるのでお伺いしたいのです。今、藤原さんは家族でやられているわけではないので、まさに働き手としては3人でやっていらっしゃるわけですね。

(藤 原)

従業員3人と私も当然。

(知 事)

では、4人ということですね。4人ということは、家族経営形態的に言うと、1世帯か2世帯分ぐらいの働きでやっていらっしゃるということですね。

(藤 原)

労働力でいいますと、そうです。

(知 事)

45ha プラス 20ha の作業請負をやられていて、それでみんなが一定の所得があるというレベルなわけですね。

(藤 原)

はい。

(知 事)

広島県の米づくりの平均的な耕作面積というのは1haに満たないぐらいなのです。つまり、20倍から30倍ぐらいの土地を集約して、なおかつ、作業請け合いという、これは現金収入を得る形でいって、それである意味で言うと初めて回るわけですね。

(藤 原)

はい。

(知 事)

つまり、逆にいうと、土地当たりそれぐらいしか人がかけられないというか、そういうことではないかという気もするのですよね。

(藤 原)

そうですね。

(知 事)

逆に言うと、今の農地面積が増えなければ、今、働いていらっしゃる人たちの数が相当に減らないと、農業だけで食べていくのが難しい、米づくりでは。

(藤 原)

そうですね。ただ、僕も経営する中で、一応5年ごとの計画を立ててはいますが、先ほど言いましたけれども高齢化で本当にリタイアされる方が多く、今は作業受託で頼まれてやっているけれども、来年からは全部任せるよという形で、うちもどんどん面積が増えてきたわけです。これからまだまだ増えてくる。そういった方が出てこられて、そこでなくなる農地というのが出てくるわけですが、特に三次でも法人化ということで何社か集落法人ができてはいますが、まだまだそれでも抱えきれない農地というのは当然出てくるので、そういった形で外部から来られた若い方が、いくら米づくりをしたいと言っても、地域性とかがあって、その人に任せられないということもあると思うのですよ。

(知 事)

急にはそうですね。

(藤 原)

そういった中でも、今、集落法人が雇用対策事業という形で、やりたい方をその法人

で受け入れをして、研修の場という形で、そこへ給料をしばらくの間補助事業で出す。そして、そこから独立するという形を今の事業はされていますけれども、国の試算でいえば、成り立たせるには1人10町、米でいいますと10haやらないとなかなか採算にあわないという数字が出ています。

(知事)

そうですね。何が悩ましいかという、つまり、これまではある意味でいうと兼業が前提になっていて、1人0.7haとか1ha弱の米の収入と、それから兼業の仕事で、それで所得が成り立つという絵柄だったのです。40haあったら40人ぐらい住んでいらっしやるということなのです。ところが、集約化されていくと40haで3人しかそこに住めないと。ほかに収入があれば別なのですが、今、ほかに収入がないことがだんだん問題になってきているわけですね。だから、農業として自立するためには、必然的に土地の集約化、つまり、コスト的にいうと労働力を減らすということなので、そうすると、必然的に、そのコミュニティにおいてサポートできる人、つまり、住める人の人数が減っていくのではないかと。これは逆にコミュニティの希薄化につながっていくところがあって、私はこれをどう考えればいいのかと、正直まだ自分でも解がないのですけれども、それはどうお考えですか。

(藤原)

前にも知事にお話ししたことがあるのですけれども、農村がその農村の形態を維持するには、やはりその農地が守られていないと、そこは崩壊につながると思うのです。だから、例えば1人の方がつくられなくなったのを隣が助けていく。それが昔の姿ですね。

(知事)

そうですね。

(藤原)

今それがなかなかできなくなって、当然若い方も農業から離れていますから、いくら家に田んぼがあっても、僕らがそこを頼まれて、受けさせてもらって、仕事としてやらせてもらっていますけれども、お話を聞くと、今思えば、昔は大切な農地なのです。先祖代々から引き継いできた農地です。守らなければいけないという、自分より上の代は思っていると思いますけれども、今の若い方というのは、逆に田んぼなんかいいほうがいいという思いが強いですから、そういった流れの中で、当然自分の代になったときにはつくる気もないし、逆に誰がつくる方がいらっしやれば、ただでもいいから、逆にお金を出してでもいいからつくってくださいという流れが出てきています。そういったところへ、今のよ

うにつくりたい方は必ずいると思うので、そこへ集約するようなシステムにするとか、農業委員会とかありますけれども、農地を集約して、つくりたい方へ持って行くというシステムづくりというか、それをつくっていくというのは大事なことです。今の農地のもつ機能というのは、先ほど言いましたけれども米をつくるだけではないので、多面的機能といいますけれども、先般大雨が降りましたよね。そのときに水をためる役目であったりとか、都会の方の癒しの役目であったりとか、そういったところも多々あるので、そこはちゃんと守っていかなければいけない。新規就農者の方の掘り起こしも必要なのですけれども、現に今いらっしゃる方をある程度サポートなり、あるところに成り立つまではリタイアされないように守っていく。当然その方の努力も必要なのですけれども。当然うちも会社化していますから、次の後継者というのは何年か後には考えなくちゃいけない。今の従業員の中で当然やる気があればバトンタッチもしますし、そういった切替えて、一つの農業という枠の中に縛られるのではなくして、一つの産業として、みんながやりたいと思える産業になっていけばと思います。

(知 事)

そうですね。ありがとうございます。

(藤 原)

ありがとうございました。

(知 事)

ちょうど今、計画をつくっているものですから、私もいろいろ気になることがあり、お聞きしました。ありがとうございます。

それでは、山崎さん、<sup>やまざき</sup>山崎さんですね。

(山 崎)

はい。山崎です。三次町から参りました。去年までは十日市に住んでおりました。

三次市の駅前開発に伴って立ち退きという問題がございまして、それで三次町へ。それまではどこに住もうか、主人のいた東京に帰ろうとか、世界は広いし、外国でもいいのではないかと、いろいろ考えましたけれども、なぜかやっぱりこの三次がいいなと言っていたところに酒蔵跡が、3年閉じて雨漏りになっているのを見つけました。試しに見に行かせてもらおうじゃないと言って、見に行った日が大雨の日で、傘を差して歩かないといけないぐらいの雨漏りでした。

(知 事)

蔵の中をね。

(山 崎)

中です。かび臭くて、真っ暗で、今みたいに全部整理していないですし、ごみの山で、どうなのだろうと思いながら、蔵が泣いているねと話していて、縁あってそちらに移ることになったのです。今まで古い家を買って住んでいたものですから、新しい小さな家に住みたいという計画を立てていて、私も改めて京都の造形芸術大学に進学しまして、空間演出デザインを勉強して、自分の家を小さく、理想的な家を建てたいと思っていたのですが、また古い家を買ったねという形になりました。だから、突き動かされるようにどうしても古い文化と触れることになりました。文化と触れるということは、生活文化なのです。三次という文化を調べていくようになり、近所の人からも話を聞くようになりました。そしたら一番は広島県がつくった風土記の丘で、人が来られたら案内します。京都とか東京とかいろいろなところから人が来られますし、もちろん外国から預かることもございまして、去年も蔵プロを手伝いにスイスの青年がやってきて、1 ヶ月半いたのですけれども、訳が分からんけどやってみよう、一緒にご飯食べようなど、そういう田舎の気質が残った生活文化を目指していくのがこの今の古い蔵の中で先に進む道かなと思っています。

過去を掘り下げると、風土記の丘の古墳時代から、三次氏がいた時代、浅野長治氏が江戸時代を治め、大きな蔵ができたのは明治 13 年です。それで今に至っているのです。でも、江戸時代の文化がかなり今も伝授されていて、三次人形もいま現在もつくられていますし、三次の鶺鴒も長治公の時代からです。それから、稲生物怪物語というのがあり、稲生平太郎の生家が歩いて1分ぐらいのところにあります。文化を掘り起こせばたくさんあるのですけれども、私たち自身が生まれ育った文化というものを捨てて、生活の便利さを求めて都会に出ている状態です。さっき空き家バンクでIターンで来られたというお話がございましたけれども、農業のIターンの空き家バンクはございますけれども、商家、あそこの町屋は本当に空き家が多いのです。だから、せっかくハード面で石畳をつくっていただいて、電柱地中化、それから外灯も付いているのですけれども、一方通行を車がたくさん、20 kmで走るところが60 km、ひどいときは夜中は80 kmという交通で、石畳はみな掘り下げられています。三次に来られた方に川土手を案内したときに、お客さんの観光客のほうが、「石畳すごい掘れていますし、誰も歩いてない町ですね」と言われます。比熊山はきれいでしょうか、箱庭のような庭でと言うのですけれども、自然はいい。だけどもう一つ三次は何かしないと、というのをお客さんのほうから言われます。卑弥呼さん、この蔵にやってきて生活できるのかという声も聞きます。なんとか生活する基盤をつくらうと思っています、蔵プロジェクトというのを始めた。古い蔵という存在を知ってもらうこ

とが一番なのではないかと思ひ、蔵の中で遊ぶことを中心に文化面を掘り下げるような活動をしています。先月からは月に1回、第2日曜日というのを、今月は8日の日曜、明日ですね。明日、開催するのですけれども、日本そばをうったり、それからビアガーデンをしたり、今は稲生物怪の小屋をつくっているものですから、それを月に1回は開放して見てもらおうじゃないかという形をとっております。でも、先々、尾道松江線ができたり、インターチェンジからまっすぐ畠敷に向って橋もできます。そしたら、また、今の私の住んでいる出雲街道と銀山街道の交わった地点の道路は、また車だけが、近道になるので、走る道に変化するのではないかと思うのです。せっかくの文化は車で通ったら全然体得できないのです。私自身も学ぶ気じゃないけど、学ばざるを得ない。これは今、空き家にしても、歩く町に仕立てるにしても、何かしないといけない。個人でやろうとして、蔵も直そうと思っていたけど、億とかかる値段とか、大きな蔵を起こしたりするのは甘いことじゃない。やりたいこととできることのギャップをすごく感じまして、それなら自分にできることをまずやって、できなければこれは仕方ない。蔵は迷惑かかるから壊さないといけないであろう。倒れるとまた人身事故があってもいけないし、だけど、できる限りをやって、志を通していく。粘り強くやってみようかなと、今はそれに徹しています。

未来的にはやはり芝居小屋ができたらいいとか、物怪に関するものができたらいい、三次人形に関するものができたらいい。蔵プロジェクトのときにアンケートをとっているのです。後ほど知事にも持って帰ってもらうように用意させてもらったのですけれども、やはりアンケートの中にも、残して当たり前という感じで書いてあるのです。蔵はあって当たり前だろうという形で書いてあるのです。

昨日、東京のやはり三次出身の女の子から電話がかかってきまして、来年の蔵プロジェクトの話をしてくれました。来年の蔵プロジェクトは、蔵で私は結婚式を挙げたいのだと。花嫁行列を太歳神社までしたいと。でも、6月だから暑いよとか、貸衣装を貸してくれないよ言ったら、でも、山崎さんが頑張っているのに、みんなでやらないとと言ってくれた。今月の8月21日に今年の蔵プロジェクトの反省会をみんなでするのですけれども、やはり来年に向けての話を、だんだん私自身じゃなくて、みんなが次のことの参加、1人ずつがこうやってマイクを持って話して、次は私はこうしたいというのをもらうようにしています。

それが蔵の持つフィールドであり、蔵をどうしたらいいか行く方向はまだ定まっていないうのですが、自然にこうやって、こういう場も与えていただいたことですし、お金以前に、知恵と力を絶対もらえんと思ひます。蔵プロを10年たったらやめて更地にするとよく言うのですけれども、でも、蔵が倒れた姿を考えるととても考えられないのが今の現状です。広島県の山の玄関口に三次がなると思っております。

(知 事)

ありがとうございます。そうやって周りの人を巻き込んでいくというか、それがすごく大事だと思うのです。これは私の個人的な意見だけじゃなくて、さるところでこの会をやったときに、やっぱりそういうテーマが出てきて、例えば行政がお金を出すというのはある意味でいうと簡単なのです。1億円出しますとって1億円出す。でも、それは山崎さんにしか広がりがないのです。そうすると、そこで終わってしまうのです。できた時点で終わって、また次にやりたいからお金くださいという話になっていきがちでして、むしろ継続している活動を見ると、そのときに議論になったのですけれども、リソースが足りていない。お金にしても何にしても資源が足りていない。足りていないと、みんなが一生懸命よってたかってこうしよう、ああしようと、いいものにしていくのです。たくさん人が集まるから、活動が継続する。

(山 崎)

そうですね。貧乏が力を生む気は今、しています。

(知 事)

そうなのです。だから、それをやっぱりできるだけ大事にする。お金よりも今おっしゃったような人間の、人の知恵とか、つながりだとか、そういうのが本当にいろいろなものに変わっていく、前に進めていく原動力ではないかという感じがすごくします。

(山 崎)

そうですね。自分の幸せというのは、人が喜んでくれると幸せなのだ、最近すごく気が付くようになりました。蔵で遊ぶというのはみんな働いているのです。コーヒーを飲みに来たり、手伝ったり、だけど、これはすごく大事なことではないかと。皆さんが自分を見つけているのです。それを眺めているのです。

(知 事)

すばらしい場を提供されているということですね。

(山 崎)

まだまだ、でもなくなるとあれなのですけれども、ちょっと自信がない面もあります。

(知 事)

いえいえ、大丈夫です。ありがとうございました。

それでは、岩崎さん、私は湯崎<sup>ゆざき</sup>で、今は濁<sup>ぬ</sup>っていますけれども、もともとは湯崎<sup>ゆざき</sup>だった

のです。うちの親戚はざき派とさき派に分かれていまして、くだらないことですみません。

(岩 崎)

純粹にさきの岩崎でございます。清河でございます。地域づくりのことについてちょっと話をさせていただければと思います。

私どもの地域も大変寂れていっている地域でございます。平成 14 年 6 月に地域の者が 9 人で、ちょっとあの当時、我々にも大金ではあったのですが、100 万円ずつ出資をしまして、それで有限会社ブルーリバーという法人組織をつくりました。

さて、これでどういうふうにまちおこしをしていくかと考えた結果、一応住宅を建てて、若い者を呼んでみようというところからスタートしたわけです。その中で出資金が当初 100 万円しかないの、どっちみち返せない。そういうことは分かっていたので、9 人のメンバーの約束として、出資金は返さないよと。やめるのは自由だけど、お金は返さない。あと、地域づくりをするためにつくった会社だから、配当金、こういうふうなものは一切ない。そういうわけで、会社の設立の目的は、地域人口の確保に努める。そしてまた地域の価値観を高めていく。願わくば、子どもがいる家庭を呼んでくる。こういうふうなことを目的で始めたわけでございます。

始める当初、利益とかそういうことを考えないでやっておりましたもので、いざ融資を受けようと思ったときに、お金を目的としない会社ならお金は貸せないという一つの難関に当たったわけです。これは地域が活性化し、地域へ価値観が出てくるのが利益なのだからということを一生涯懸命説得しまして、信金さん、JA さんへ御無理をお願いしたわけです。

こういう分野で、お金の直接的な補助というのは必要ないと思うのですが、できればそういう借りられるシステムですね。そういうふうなものがどうにかならないかなという気がひとつしております。

また、どっちにしろ田舎町ですので、周りは田んぼと山しかございません。どうしても田んぼを埋め立てして家を建てるようになりますので、そうすると、農地法という法律の制限を受けてきます。この農地法も、耕作放棄地などの部分が増えてきていますので、できれば簡素化していただいて、素早い認可が下りるように、また、基盤整備等が済んだ農地も荒れている状態ではございます。こういうふうなところにおいても、本来はできないものであっても、過疎化していく中では入ってくれる人口がいれば、そういう人の受け皿となれるような体制がとれないかなと。ああいうふうなところを痛感しているところです。

以前にも一度にたくさんの家を建てればというふうな話もいただいたのですが、やはり田舎ですと一度に多く方を受け入れていくと、今度は地域のコミュニティーがどうしても狂ってくるわけです。そのために時間はかかるわけですが、地域住民とのコミュニティーが保てるような形で人口の誘致をしていければと思って、今、一生懸命頑張りよるのです。

が、なかなかつらいところがございます。

(知 事)

ありがとうございます。今日お邪魔させていただいて、皆さん、このブルーリバーのプロジェクトを御存じか分からないので、ちょっと御紹介いただければと思うのですが、何世帯で何人ぐらい今、入っていらっしゃるのですか。

(岩 崎)

ブルーリバーが直接所有している住宅が現在 9 棟ございます。3 棟、入ってこられた方が今まで住んだ家を買取りしていただいたり、また自分で自ら青河へ土地を求めていただき、そこへマイホームを建てていただいたりしております。いま現在は 12 世帯で、45 名の方に青河で暮らしていただいております。

(知 事)

もともと何人ぐらいの人口の地区だったのですか。

(岩 崎)

青河の総人口が 508 人。

(知 事)

ですから、45 名増えたということは、約 1 割増えたということですね。

(岩 崎)

はい。

(知 事)

で、今、小学生が全体で。

(岩 崎)

今、小学生が 29 人いるわけですが、そのうち 11 人がブルーリバーへ入っている子どもであります。まだ未就学児が 9 人残っております。

(知 事)

ということは、小学校は大半がこのプロジェクトによってその地域に来られた子どもたちということになってくるというわけですね。

(岩 崎)

そうも思っていたのですが、やっぱりこういうふうにして家を建てて、よそから人が入ってくると、青河から出ていた人も、若い人がぼちぼちと帰ってくれまして、そういうところの効果も一つは出てきたのかなと思っているのです。

(知 事)

実は最近ちょうどそのテーマというか、定住交流のテーマで、県庁内でいろいろ議論をしまして、数字を見ていたのです。そうすると、三次は多いのです。三次と、ほかに多いところは言わないのですけれども、三次が多かったのです。これは、このブルーリバーの効果が大だったというのはよく分かりました。

(岩 崎)

ありがとうございます。

(知 事)

すごいことですよ。これは行政の支援というのは入っているのですか。

(岩 崎)

いや、支援は一切いただいておりません。支援をいただかないのが、逆に支援だと。

(知 事)

はい。口を出すなど。

(岩 崎)

やはり行政の手が入ると思うような経営ができないわけです。だから、自分たちにとってふさわしい経営の仕方をしていくには、やはりそういう支援はむしろないほうが、我々の場合はやりやすい。ただ、融資面とか、そういう面において、補助は要らないけれども、借りるのに簡単に貸していただける。そういうシステムがどうにかならないかなと。

(知 事)

理想的な形としては、岩崎さんがお金を借りに行ったら、市とか役所の担当者が横に座って、この人に貸してあげてくださいよとか、そういう感じぐらいがちょうどいいのかな。

(岩 崎)

そうですね。

(知 事)

先ほどの山崎さんのお話とも通じると思いますし、前回、別のところであったものにも通じると思うのですけれども、そういう皆さんの熱意が一番本当に物事が動いていく原動力だなという感じがします。はっきりいって、どの定住交流プログラムよりうまくいっているのではないかという感じがするのです。行政がやっているものより。

(岩 崎)

おかげで今も入りたいと待ってもらっている方もおられるのです。ただ、我々の資金との関係もございますので、なかなか前へ進めばっかりできないのでつらい点もあるのですが。

(知 事)

資本金はお返しにならないということなのですが、そうやって借入が順次増えていっていらっしゃるわけですね。

(岩 崎)

総体的には増えてきますが、計画どおりの返済はできています。

(知 事)

返済されているということですね。

(岩 崎)

はい。

(知 事)

だから、きちんと返済されるから、追加の融資というのも受けられるというふうに戻っている。

(岩 崎)

現在のところは回っていますが、借入もかなり膨らんできておりますので。

(知 事)

ただ、今の景気状況ですから、今の景気状況ははっきりいうと悪いわけですね。そういう中できちんと回っているというのは非常に心強いことではないかという気がしますけれども。

(岩 崎)

地域自体が受け入れ体制として、今朝も知事さんにお話ししたのですが、朝玄関をあけたらタケノコが置いてあったとか、今の時期ならキュウリとかナスビとか、そういうふうな地域なわけです。周りの方がそういうふうなブルーリバーで入ってこられた家族を見守っていただけるということで続いているのではないかと考えております。

(知 事)

どうもありがとうございました。

それでは、吉川さん、お願いいたします。

(吉 川)

吉川と申します。三次に昔から残っている先ほど山崎さんが言われた稲生物怪物語なのですが、それを基に、三次をロケ地にした映画をつくって、三次を元気にしようと。三次から出ていた人間も、当たったおもしろい映画のふるさとだったというので、自信を持って暮らせるようなことにはならんかなと、今から 11 年前に立ち上げました。先ほど知事さんにもチラシをお渡ししたのですが、せっかくですので短くこんな話だったというのを少し話させていただきます。

絵巻で残っているのですけれども、物語の発端は、先ほど山崎さんが言ったように、三次に浅野藩というのがありまして、その藩主の、これはキャラクターですが、平太郎というのがありまして、ちょうど 16 歳の若者だったのですが、ここへ相撲取りがいるのですが、隣に三井権八という相撲取りが、布野の出身なのですが、江戸のほうで活躍していたのですが、最近話題になっておりますが、酒とかけんかで首になってしまって三次に帰ってきたのです。近所の子どもに相撲を教えていたのですが、あるとき平太郎と話になって、武士と相撲取りとどっちが勇気があるかと。窓をあけたらすぐ見えますが、魔の山ではないけれども、比熊山というのがあるのですが、その頂上に触っただけでたたりがあるというたたり岩、神籠石というのがあるのですが、岩だと思っておりますが、そこで百物語をしました。

(知 事)

百物語というのは怪談なのですか。

(吉 川)

そうですね。1ヵ月たったら、7月1日、一つ目の入道があらわれます。平太郎にしがみついて引っ張り出そうとするのですが、消えてしまいます。毎日30日間いろいろな物怪が出ます。石に手足が生えたりとか、おばあさんの顔だったり、これは絵巻で残っているのですけれども、一番最後の日に、実は平太郎というのはミミズが嫌いだったのですが、灰神楽から大入道があらわれて、ミミズがごろごろ出てくるのです。近所の人、この家に住んでいたら悪いわさがたつから、おまえ引っ越せと言うのですけれども、平太郎はここで逃げたら武士の名がというのでやせ我慢していた。物怪というのは人間に危害を加えるのではなしに、怖がらせるだけなのだろうというので、だんだん観察していくようになるのです。そういうのが分かってきたから、ミミズも消えるだろうと我慢していたら、最後の日に、山本五郎左右衛門という魔王があらわれて、もう1人の神野悪五郎という日本の魔王とどっちが100人の若者を怖がらせるか競争していたらしいです。100人怖がらせたほうが真の魔王の名を名乗ろうということでやったのですが、普通なら30日間で、祇園祭りは7月1日から30日です。そのちょうど期間に重なるのですけれども、自分の魔力がなくなると。普通なら1日目で怖がって次のところに行くんだけど、怖がらんから30日間、自分の力がなくなるまで頑張ったけど、まいりましたというので、木槌を置いていきます。もう1人の魔王の神野悪五郎というのがおまえを怖がらせに来るから、そのときはこれをたたきなさい。助けに来ますと行って去っていきます。これで話は終わるのですが、これを江戸の国学者の平田篤胤さんというのが、話を絵に描いた。ちょうどそのころ江戸時代で、この話が広まったら浅野藩は取りつぶしになるというので、三次とか広島には広がらなかったらしい。明治時期になったら、講談でいろいろなところでやられた。特徴は、今言ったようにいろいろな妖怪が出てきます。水木先生も『木槌の誘い』というコミックを書かれているのですけれども、日本というか、三次というか、広島というか、宝だから大事にきなさいということも言われています。

それから、先ほど言いました岩が今もこの頂上に残っているのですけれども、とっても霊験あらたかなところで、パワースポットになっているので、知事さんも、県政に若い力を、物怪パワーで頑張れますので是非行っていただければと思います。この木槌が今、広島国前寺さんにあります。年に一遍、1月1日に寺の宝ということで開帳されます。というのが、ちょうど三次の浅野藩がなくなるとき、この後平太郎が武太夫という名前になって広島の浅野藩に仕官して、そんな関係で国前寺さんに会うのです。子孫の方も今も広島に住まわれています。絵巻も、さっき言ったように全国いろいろなところであって、本もありますし、そんなところで私は本当にあった話ではないかと思っています。江戸時代、明治時期といろいろなところで特徴があって受け継がれてきているので、そういった面で三次をロケ地にした映画をつくりたいなと思って、いろいろな活動をしてきているのです。

が、今、その資料にも挙げておりますが、「いのうもののけオペラ」というのを考えて、私は実行委員会の副執行委員長で参加しているのです。これは、池辺晋一郎さんというとても有名な音楽家の方なのですが、剣岳の点の記と言うのですか、今年日本アカデミー賞の最優秀音楽賞をとられた方なのです。影武者などの素晴らしい音楽をつくられて、地域でこういうふるさとのことを題材にしたオペラをつくるというのは、本当に全国でも稀だと思っておりますが、ちょっと関係があって、そういうのをつくることになりました。

この4月から練習にかかっているのですが、さすが池辺先生というか、素晴らしいものにできあがっております。市からも応援はいただいているのですが、来年の3月、この近くの文化会館でやるのですが、なんとか人がいっぱいになれば、赤字も出ずに、違った展開ができるのではないかと思います。

(知 事)

これは市民の皆さんが歌われるのですか。主演は市民の皆さんなのですか。

(吉 川)

そうですね。地元の合唱団の皆さんとかを募集しまして、今、100名ぐらいでやっております。

(知 事)

それはすごいですね。

(吉 川)

指導される方が池辺先生ならというので、神戸から出たいというソリストの方もいらっしやいます。できれば、知事さんも是非見に来てください。素晴らしいものです。

(知 事)

来年の3月。

(吉 川)

3月です。

それと、二番目に世界ミュージアム構想です。今、境港が有名になっていますけれども、日本で一番妖怪のグッズを持っておられる方が、川崎の市民ミュージアムに湯本豪一さんという方がいらっしやるのですが、その方は学芸員で、定年になられて、自分のコレクションが退出してしまうと。自治体などやる気があるところで、妖怪を調査、研究、また展示するような博物館をつくるのであれば貸与してもいいよみたいなことをいただい

るので、是非三次にくださいと言っているのです。なかなか今の御時世箱物をつくったりというのは難しいと思うのですが、さっき言った特徴から、稲生物怪物語というのは、三次だけではなく、広島だけでもなく、日本だけでもなく、この絵巻は結構海外にも貸し出されているというような、とってもおもしろいものだと思うのです。是非三次に来たら、この稲生物怪の絵巻、先ほどいった妖怪コレクションを中心とした博物館をつくれれば、日本中、世界中から、なかなか一遍にはならないと思うのですけれども、妖怪に興味がある人が来たら、すべて妖怪が分かるようなものができればと思っています。

それを、山崎さんが言われたように、十日市、三次のどこかにできれば、素通りせずにまたこっちの方に来ていただけるのではないかと。この一点が、映画づくりの我々の原点なのです。

県知事さんは大阪の探偵ナイトスクープという番組をご存じですか。

(知 事)

すみません、見ていないです。

(吉 川)

これの放送作家をしている人がおります。そして無人島探偵といいまして、ごつい台本を、もともとテレビのドラマ用に書いているのです。ストーリー的には、無人島に住んでいる探偵が何か事件があったら行って解決するようなもので、三次の物怪がよみがえって殺人事件が起きて、それを解決するような流れになっています。知事さんもよく広島県の入り込み客を増やすために瀬戸内海を何とか開発していきたいということも言われているので、その辺に無人島探偵で、知事みたいな探偵がおられて解決するような感じのものだと思っています。

もともと、そのプロジェクトを立ち上げるときに、たまたま知り合いに東映に行っている者がおりまして、こんなのは誰も知らんし、映画になるわけじゃないかという話だったのですけれども、いろいろな活動を通して、物怪というのは知っていただけだと思うし、それでファンを増やして行って、また企業なり、こうして県知事さんと今日お話をさせていただいていますけれども、いろいろな市なり県なり国なりが応援していただければ、劇場公開もおもしろいからできるのではないかと考えていますので、是非とも協力をお願いしたいと思います。

何年前かに妖怪大戦争という映画が角川であったのですが、そのときに主人公の稲生タダシという神木隆之介が演じたのが、実は稲生という名前なのです。何でもかといいますと、この作品にかかわったのは荒俣さんや京極さんがこの稲生物怪物語のファンで、荒俣さんは特にもし映画をつくるときには応援してあげるよと言ってくれているので、すごいパワーになると思います。その中の妖怪が、山本五郎左右衛門というほかの妖怪の物語には

出てこないやつなのですが、これは荒俣さんが自分が仮装して出られています。京極夏彦さんがさっき言った神野悪五郎というもう1人の魔王になって、そういった形で、一般には知られていないのですが、こういうおたくと言ったら失礼ですが、そういう世界ではすごく盛り上がっているのです、今言った三つのことが成功できれば、もっと広島県、また三次にたくさんの方が来られて、ああおもしろいなと。境港とも連携して、境港に負けなぐらいものができるのではないかと思うので、もう一歩でそういう境港を抜くような感じになると思いますので、いろいろな面で応援していただければと思います。長くなってどうもすみません。

(知 事)

地域の一つ光るキャラがあるといいですよ。三次の伝統の物怪というのが、物怪とおっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが、物怪と言えば三次だと、三次と言えば物怪だいうふうに認知されるようになったら、力になりますよね。境港も、最近では境港イコール妖怪、妖怪イコール境港みたいになっているから、ドラマの影響もあると思いますけれども、人がたくさんやってきていますので、是非是非それは頑張っていたらと思います。ありがとうございます。

(吉 川)

ありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございました。

それでは、橋本さん、お願いいたします。

(橋 本)

橋本と申します。三次市作木町で酪農業をしております。本日は酪農業に携わる傍ら、地域づくりということで、NPO法人さくぎ振興会、それから、作木町自治連合会というところにかかわっておりますので、そちらのほうからいろいろとお話をさせていただきたいと思っております。

まず、さくぎ振興会ですが、作木町、御存じのように高齢者がたくさんいらっしゃるまちですので、そういった方々の知恵とか、パワーといいますか、技といいますか、そういったものを全面に押し出しているいろいろな活動していきたい。そういった思いが痛烈にありまして、農作業の体験であるとか、そういった方々が持っておられるいろいろなことを体験していただくような企画をやっている中で、三次市の指定管理施設でありますカヌー公園さくぎでや、川の駅、それから、最近では、グループホームさくぎ天楽庵というのも経

営させていただいております。そういった交流であるとか、御老人のいろいろな安心、どう言うのですか、作木でいろいろとやっておられた方を最後まで安心して暮らしてもらえよう、そういった組織を立ち上げていきたいという活動をさせていただいております。

作木を売り出すということについては、一番は作木ブランドといいますか、何か特産になるようなものの開発ということが一番ではないかと考えております。

作木では 10 年ほど前から「わかたの酒」という体制で、交流も含めた酒づくりの会というのも立ち上げたり、ポン酢であるとか、はぶ草茶であるとか、ゆず茶であるとか、ゆずみそであるとか、そういったものも特産品としてあるわけですが、こういったものを今まで以上にいろいろな方に広めていきたい。そうすることによって、それをつくっていただいている高齢の方々がまた元気になっていただければいいな。そういうことのお手伝いができるのが我々さくぎ振興会ではないかというふうな思いで日々頑張っております。

(知 事)

ありがとうございます。いろいろなところの指定管理者をやられているというお話だったのですけれども、御本業は酪農をやられている。

(橋 本)

そうです。

(知 事)

かなり忙しくないですか。

(橋 本)

かなり忙しくて、家族内からブーイングもあります。今回の参加者名簿の中にプロフィールを書かせていただく中で、酪農業というのを私としては書いておったのですが、県の方がそこを抜きにされて、NPO と自治連合会の理事ということで書いていただいたので、非常に私的にはまずかったので、すぐ電話して訂正していただいて、酪農業の本業のほうを書いていただきました。

要するに、金にならんことばかりようしているんで冷ややかな目で見られているんですが、作木で生まれ育って、高齢化が進んでいく作木がこのままではいけないのではないかという思いがいっぱいあって、いろいろな取り組みをさせていただいております。

(知 事)

さっきの三好さんのお話とも通じる感じですね。自分のことはともかく、ともかくと言うとあれかもしれないですけども、そうやって地元の皆さんのために役に立ちたいとい

うお気持ちが非常に強いと。

(橋 本)

そうですね。私の気持ちもあるのですけれども、言われれば仕方がないみたいなのところもあって、周りの者がうまく使っていると言われればそういうこともかも分かりませんけれども。

(知 事)

でも、それはなかなか、言われただけで嫌だったらみんな断りますから、それだけ作木のいいところというのをお持ちなのだと思うのですが、それはふるさとであるということでも当然なのですが、こういうところが作木のいいところだというのはありますか。

(橋 本)

つい最近特にクローズアップされました百何歳の方で行方不明の方がたくさんいらっしゃるということが、広島県にはあってほしくないと思うのです。私たちは自主防災会というのもし立ち上げているのですけれども、そういったところで一番必要なことは、個人情報とは言いながら、隣のじいちゃん、ばあちゃんがどこに行って何をしているかということが確実に押さえられるということだと思いますから、基本的にはそういった活動ですよ。いろいろと今まで地域に貢献された方をそのまま寂しい思いをさせてはいけないという思いがあります。

(知 事)

いろいろお世話になってきた土地と人たちに対して、ずっと面倒を見ていきたいということですね。

分かりました。ありがとうございます。大変だと思うのですが、是非引き続き頑張ってくださいと思います。ありがとうございます。

すみません、お待たせしました。山岡さん、最後にお願いいたします。

(山 岡)

よろしく申し上げます。私は甲奴からやってきました。こちらに書いてありますように職業は山岡酒造を営んでおり地元でお酒をつくっております。

(知 事)

瑞冠（ずいかん）ですか。

(山 岡)

はい。ありがとうございます。

それと、地域では甲奴国際交流協会というもののお世話をさせていただいてまして、先に国際交流協会の現状から少しお話しさせていただきたいと思います。

ジミー・カーター元大統領が 1990 年に甲奴を訪れていただいて、それ以来の御縁でカーターさんの主宰するカーターセンター、それからカーターさんの生まれ故郷に近いアメリカシティというところと、三次市と合併する前の甲奴町の時代から交流が続いています。今年で第 19 回になりますが、中学生を中心とした訪問団を組みまして、1 週間のホームステイを、去年はちょっと途切れたのですが、毎年行っています。

現在、私たちはそのお世話をさせていただいているということです。ただ、これが合併する前は全面的に甲奴町役場のほうで主宰されていた事業でありまして、それを合併を機に民間の機関をつくって推進していこうということで私たちが受けています。今、中学生を中心にやっていますけれども、本当を言うと、カーターさんはノーベル平和賞ももらいまして、今の世界の流れからいうと、人権や平和活動、貧困対策など、すごく今の世の中の流れにあった活動をやっていると思います。今、私たちが振り返ってみて、20 年いろいろ交流させていただいていますが、本当の意味でのカーター大統領との交流が十分できていないなと反省しています。いわゆる中学生の訪問というのはもう 600 名を越えてやっております。

(知 事)

それはかなりの数ですね。

(山 岡)

はい。ですから、最初に行った子どもたちは今 34 歳ぐらいになっていまして、社会に出て活躍をこれから期待される世代になっています。

この 20 年、ちょうど節目なので、そういった子どもたちにいろいろアンケートをとって、また、私たちも国際交流やこれからの活動にも応援をさせていただこうと考えています。

あと、仕事のほうなのですが、先ほど昔使っていた酒蔵を利用していただいているいろいろ大変ですけどやっていますということでしたが、一応うちも昭和 12 年に建てた蔵なのですが、まだつぶれずに酒蔵としてやっております。やっぱり蔵というのは、最初につくった目的といいますか、その事業をやっていないと、本当に中で人が手を加えて活動していないとどんどん傷んでいくもので、その辺の重さというのは日々感じております。

私も 4 代目になりまして、26 年前 Uターンしてこちらに帰ってきて、周りが田んぼばかりで、当時、うちの蔵はそんなに特徴がなかったので、何か特徴のある蔵にしようということで、まずお米からやろうということで、お米を契約栽培しまして、当時、食管法が

まだ一部生きていた時代なので、あまりいろいろな米がつかれなかったのですが、ちょっと風変わりなお百姓さんに頼んで、いろいろなお米をつくりまして、現在もその流れが続いています。亀の尾とか雄町とか山田錦とかいろいろお米を頼んでつくっています。つくり手も地元の若い人たちにお願いしてつくっております、水もいい水が出るということで、お酒というのはつくと非常に地域の文化なり、住んでいる人の気持ちを代弁できる商品なので、実は蔵は殺さずに生かしていただいたら非常に利用価値は上がると思うので、その辺のことも自覚して、お酒は文化であるというふうに思って頑張っております。

(知 事)

その代弁するというのは、どういうイメージなのか。

(山 岡)

そうですね。やっぱりお酒というのは不思議で、地元の人が外部の人と交流するときに、これはうちの酒じゃけ、うまいんじゃけ飲んでみいというふうに行って行かれたときに、外部の人が非常においしかったと、こんなうまい酒は飲んだことはない、大変褒めていただいて、わしもうれしかったというふうなことです。それとお酒というのは全国どこでも一緒ではなくて、地域の特徴があって、味わいが出てくると思うのです。自分の地域の味わいを地域の外の人に評価していただいたり、贈り物だったらギフトしたときの自分の気持ちがよく伝わったということで、そういう意味で地域の気持ちを代弁できるお酒をつくりたいなと思っています。

(知 事)

誇りになるということですね。

(山 岡)

そうですね。

(知 事)

ありがとうございました。カーター大統領との交流が十分にできていないというのは、それはある意味でいうと学生じゃなくて、大人のレベルでのそういった世界平和などについてということですか。

(山 岡)

そうですね。全くそのとおりで、いわゆる親善訪問という形での交流はいまだにずっと続いていて、しっかりやってきていると思うのですが、少しレベルを上げて、目的を持つ

てお互いに交流しあい、刺激しあおうというふうな関係が十分できていない。その辺のところは、本当を言うとこれだけのさっき言われた光るキャラクターで、アメリカの元大統領とこちらから一年に1回行ったら会えるチャンスがあるよという大事なつながりを持っている割には、その内容を十分生かしていないというふうには思っています。

(知 事)

今度は広島でノーベル平和賞受賞者サミットというのがあるのですけれども、11月ですね。今のところカーターさんは入っていないので、できれば是非来てくださいというのをお声がけいただいて。

(山 岡)

私たちも呼びかけはしております。

(知 事)

そうですね。ありがとうございます。

(山 岡)

呼びかけはしておりますが、いざ本当に来られたらどうしようかと。県にお願いしようと思っておりますが。

(知 事)

それはもちろんです。今、県と広島市で設営のプランをやっておりますので、会議はもちろんあるのですが、是非甲奴にももう一回来ていただいて。2回来られているんですよ。

(山 岡)

はい。1990年と94年と2回おいでになりました。

(知 事)

そうですね。ですから、もう一回もし来られたら、これはすごいことで、ジミー・カーター記念館をもう一回見てくれと言って。

(山 岡)

分かりました。また是非お願いしてみたいと思います。

(知 事)

一つだけお伺いしたいのですけれども、こうやって地域で直接国際交流というのをやっている、特にカーターさんみたいな非常に著名な人を經由してやっていくことの意義というのは、どういうふうにお感じになっていらっしゃいますか。

(山 岡)

はっきり言いまして少し荷が重たいとは思いますが。ですから、私たちのまちは人口 3,000 人なのですが、旧甲奴町の時代は甲奴町だけでものを考えてやっています、今は三次市全体でバックアップしていただいています。本当言うともっと広く全体で押し上げていただくような活動ができれば、もっともっと広がりが出てくると思います。FF フレンドシップフォースという活動がありまして、カーターさんの奥さんが始められて、大人がお互いの家をホームステイして国際交流を深めようという組織があるのですが、あれも合併と同時に立ち上げました。FF のフレンドシップフォースの広島支部を、最初甲奴町で受けてやっていましたが、世界から来られる方は広島にみんな来たがるのです。たくさん世界からオファーがあるのですが、受ける私たちのほうが能力がなくて、さっきもいろいろお話が出ていましたけれども、現実には仕事をしながらいろいろな活動をするということで、そうそう対応ができない。そのうち広島市内とか尾道とかそういった方も入ってきていただくようになりまして、今は逆に広島市に本部を置いて、三次と広島と尾道と 3 地区が連携しながらやっています。再来年はその FF が世界大会を広島でやるということで頑張っています。

(知 事)

それは楽しみですね。子どもたちも直接そうやって外国との関係を結んでいくということは、刺激を受けていますか。

(山 岡)

これは受けていると思います。今までちゃんとしたアンケートというのはとっていませんでしたが、今回、交流に参加して自分の人生にとってどうだったかとか、進路について何か影響がありましたかとか、そういったことはきちんとお聞きして、これからの活動に役立てていきたいと思っています。

(知 事)

ありがとうございました。

## 自由討論

(知 事)

今日は少し時間を延長しながら、皆さんの御意見をお伺いしてまいりました。残り 15 分なのですけれども、全員でのディスカッションに入りたいと思います。

まず、私からちょっと質問させていただきたいのですけれども、三次もかなり合併をして大きくなったというか、地域的に広がっていったと思うのですが、今、三次市としての一体感というか、それはどういうふうにお感じになっていて、よかったなと思うことや、こういうことが逆に困るなということがあったら教えていただけないかと思うのですが、どなたかいかがでしょうか。では、甲奴の山岡さん。

(山 岡)

私のまちは旧甲奴郡でして、実は昔は税務署などは府中市のほうを向いていました。だけど、農業関係は三次市を、保健所は福山をなど、いろいろなところを向いている地域だったのです。結果、3 町がばらばらになりまして、上下町が府中市、私たちは三次市、総領町は庄原市と、行政的には分かれてしまった地域で、おっしゃるようになかなか三次市との一体感というのは少なくて、働きに来ている人は多いのですが、いわゆる一緒にというのは昔は非常に少なかったと思います。

ただ、私は正直よかったなと思うのは、三次市というのは優しい雰囲気地域ですね。私たち甲奴のまちも非常にそういうところなので、お隣の上下町さんの話を聞くと、やっぱり府中市さんの端っこになるよりは、三次市の端のほうがよかったかなという気はしています。ただ、逆に私たちの中に壁がありまして、三次のきんさい祭りで国際交流のイベントがあったのですが、そういうところに私たち甲奴の者が参加をしていないということはあるのです。ですから、そこら辺が少しまだ時間がかかるのかなと思います。

(知 事)

それは参加されたいと思われませんか。

(山 岡)

そうですね。これからは参加していきたいと思います。

(知 事)

ありがとうございます。

(山 岡)

なんといっても川が私たちは江の川に流れておりますので。

(知 事)

流域は一緒ですね。

(山 岡)

そうですね。

(知 事)

ありがとうございます。

どなたかほかにいかがでしょうか。山崎さん、お願いします。三次ですね。

(山 崎)

はい。三次町です。今のまちづくりの取組を三次町は 30 年前に立ち上げたらしくて、バブルの時代にちょっと中断し、今、またまちづくりをやろうということになっており、集まりを今からだんだん重ねていこうと思っているのです。三次の宝、今、県知事さんが広島県の宝探しとおっしゃいましたけれども、三次に生まれ育った人でも三次を知らない人がすごく多いと思います。それぞれが三次を知って、自慢できる三次の教科書みたいなのをみんなで作りたいという案も出ています。

(知 事)

教科書ですね。

(山 崎)

はい。今のカーターさんがそういう人だったんだとやっと知った状態でしから、それぞれの地域のいいところ、それを理解して、検定をつくってもよろしいと思います。広島の平和都市から一番近い、雪が見れて、川があって美しい風景を保っているところです。今、岩崎さんの空き家バンクの話がありましたが、絶対町屋もまちづくりをやらないと倒れるなというのを実感しましたし、地域の方々にも是非三次町も知っていただきたい。歴史が三次全体の宝になればいいなと思います。

(知 事)

ありがとうございます。一点、岩崎さんのために申し上げますと、岩崎さんは空き家バンクじゃなくて、新しい家を建てちゃったのですよ。すごいです。空き家じゃなくて、人を

呼ぶために新築の家を建ててしまった。自分たちでお金を出して、これはすごいと思います。

(山 崎)

今日も明日もあさってもまた泊まりに来てくださる方がいるのですけれども、ただ、来ると落ち着いて星を眺められていたりする。一昨日はジャズシンガーさんが東京から来られていて、ずっと星を見られていたんですよ。やはり来られる人によって、三次のよさを改めて実感して、それをみんながわけあえればいいと思うのです。だから、定住という話も出ましたけれども、そういうハードの前に、自分たちがやるべきことを一生懸命連携して、三次町を含め、また、三次市全体がやっていきたいなと思っております。

(知 事)

みんなだね。ありがとうございます。

どなたかもう1人いらっしゃいますか。では、岩崎さん、お願いします。

(岩 崎)

合併しまして非常によく言ったと思うのが、やっぱり自分たちのまちを自分たちでつくる、そういう感覚が何となく沸いてきたように思います。

(知 事)

それはどうしてですかね。

(岩 崎)

希望することができるわけです。行政がこうしろ、ああしろ言うのではなく、自分たちがこういうふうにしたいということが、ある程度今やらせてもらえる。そういう形になってきていますので、そういう面ではすごくよかったと思っております。

(知 事)

ありがとうございます。それは合併そのものもあると思いますけれども、合併した後の今の市の方針というか、そういうことにかかわってくるということですかね。

(岩 崎)

そうですね。

(知 事)

ありがとうございます。

次に、もう一つお伺いしたいのが、先ほどの農業の続きです。今日は農業関係の方が、酪農も含めて、たくさんいらっしゃるのですが、今、県は集落法人化を進めており、これについてはいろいろな御意見もあるのですけれども、皆さんはこの集落法人化を進めるといふ県の施策について、思うことがございますでしょうか。すみません。これは農業に関係ない人にはなかなかお答えが難しいと思うのですけれども、浜井さん、どうですか。

(浜 井)

私は会社にいるのが嫌になった部類ですから、そういう法人の中に入っていくというのは、また会社に入っていきような感じがあって、はっきり言って嫌ですね。

自分でできるところに非常に魅力を感じています。ただ、収入面では少ないので、嫁さんには働いてもらおうということですよ。京都の綾部市の塩見さんという人ですか、『半農半X』という本を書いているらしいのですが。

(知 事)

半農半X。

(浜 井)

そうです。半分農業で、半分はほかの収入を得てやっていこうというようなスタイルで、綾部市に結構人を呼び込んでいるらしいのです。そういうスタイルというのが、これから都会でいろいろなスキルを身に付けた人が田舎でやっていこうという場合には入っていきやすいのではないかと。例えばインターネットがすごく得意だという方であれば、農業を傍らやりながら、そのインターネットを生かした仕事を別にやっていく。うまくいけば、それを使って自分のつくったものを売っていくとかですね。

(知 事)

イラストレーターとか。

(浜 井)

そうですね。絵を描きながら農業もやって、それをねたにして、またおもしろい絵を描くというのもあると思いますし、そういう方向のほうが、広い土地が持ちづらいこの広島県においては向いているのではないかと。

(知 事)

ある意味でいうと、ちょっと表現が変かもしれないですけども、新しい形の兼業の農家と言うのですか、そんなイメージですかね。

(浜 井)

そうですかね。会社員として一方でやりながら農業をするというのとは違う。自分の特技を生かしながら農業もやるというようなスタイルがいいのではないか。

ちょっと話がそれるのですけれども、私が最近感じていることを言わせていただきたいのですが、都会から移り住んできて最近すごく感じるのが、都会にいるときは自分の居場所というのが職場中心にあったわけです。家庭というのは、夜遅くに帰ってきて、子どもとも触れ合う時間がないし、ましてや地域の人との触れ合いというのも会釈をする程度、あまりかわりあいがいいという状態だったのですが、こちらへ来たら、否応なしにかかわらざるを得ない。というのは、人数が少ないというのがありますし、周りに高齢者が多いというのがあるので、総体的に若手の働き盛りの我々というのは期待される部分が大きくなって、地域でも家庭でも自分の仕事でも、存在価値が上がるというような気がするのです。

(知 事)

生きている感じがしますね。

(浜 井)

そうですね。生きててよかったみたいな、生きている実感というのが上がっている気が私はしています。その一方で、秋葉原でひどい事件がありましたけれども、あの人が言っていたのでちょっと印象に残っているのが、自分の居場所がなかったと。それで、自暴自棄になってああいう事件をやったというのがあります。広島市でも、広島市の中心の企業でありますマツダさんの中で事件がありました。都会暮らしで自分の居場所を見つけられないでいる。そういう方が増えている。多いのではないかと。そういう人たちに私が勧めたいのは、思い切って自分の居場所を変えて、田舎のほうに移り住む。そういう中で、総体的に自分の存在意義が上がっていくということを思っています、Uターン、Iターンをほかの人にも勧めたいという気しております。ちょっと言われたことと違いますが。

(知 事)

いえいえ、ありがとうございます。皮肉なものですよね。人が周りにたくさん住んでいると人間関係が希薄になるという、人が周りに少ないと人間関係が濃くなるという、これは皮肉なものだという感じがします。ありがとうございます。

今の農業のテーマについて、児玉さん、酪農関係はちょっと違いますか。

(児 玉)

私は酪農から、ヨーグルトに変わっていますから。

(知 事)

ヨーグルトオンリーなのですか。

(児 玉)

そうです。昔酪農をしていて、それからこの仕事を一本です。一点、ヨーグルトの個人のお客様で東京から恐らく 10 名以上は三次出身の方がリピーターでずっと注文いただいているのです。いわゆる双三郡という時代から、三次市に変わって、三次市三和町という住所で、三次からこういうものをつくっているのかという、地元の方の思いが、そういったつながりが結構あるので、そういう意味では、逆に出ていった方へのお礼というか、感謝の気持ちがあります。

(知 事)

なるほど。ありがとうございます。

時間がなくなってきたので、一言だけ。

(藤 原)

先ほどの法人のことです。広島県は先ほど言いましたように、集落法人の設立と企業参入のほうに力を入れられて、これは致し方ないなというのはあるのです。私のように農業が好きで、20 歳から飛び込んで、小さいころからお手伝いをしていましたけれども、そういう人材がない中で、やっぱり集落を守っていこうと思えば、その集落法人というのは儲けを主にした集団ではないので、いかに地域の農業を守っていくかというのを、個人でだめなので、皆さんと一緒に守っていきましょうというのが集落法人だと思うのです。ただ、数多くできている集落法人は、その中での後継者が育っているかという、なかなか後継者はいない。だから、設立された中心メンバーが歳をとられていく中で、その後を育てていくというのは今後の課題だと思うのですが、やはりそこは元気な農業で、飛び込んでこられる、先ほど言いましたような、そういったところが受け皿となって、若い方の受け皿、勉強の場になるように、仕組みづくりができればと思います。

(知 事)

また、そういうところへ土地がまとまりますからね。そこである程度進んで、その中で

もやるのが難しくなったというと、藤原さんのような方がそれを引き受ける。最初は請負から始まるかもしれませんがけれども。

(藤原)

農業に関して言えば、ほかの産業もそうだと思うのですが、やはり夢が持てる仕事だと思うのです。私は夢を持っています。相手がすべて生き物であって、私の場合はお米なのですけれども、酪農であっても、果樹であっても、野菜であっても、すべて相手が生き物で、自分が手をかけただけのものは必ず返ってくるというのがありますから、逆に手を抜けば、それはしっぺ返しが来ます。そういった生き物相手の職場、仕事、やはり夢を持って飛び込む若い方々が現にいらっしゃるわけですから、そういった方がどんどん夢を持って飛び込んで来れるように、うちのほうも一つの場所として提供できればと思っています。

(知事)

ありがとうございます。藤原さんのような方に農業をいろいろ語っていただきたいですよ。ありがとうございます。

橋本さん、一言いかがですか。

(橋本)

我々のところは、今、法人化がほとんど進んでいません。というのは、もうその域を超えているというか、年齢的に、それから、地形的にも急な、非常に山あいの条件の悪い地域ですから、そういった意味で、今、私たちがやっているさくぎ振興会の中で農業支援をする部門を持っております。SOSを出された方のところをお手伝いするという形をやっているのですけれども、これですできるだけ長く美しい郷土を保っていきたいという思いがしております。ちょっと法人は無理かなという感じがしています。

(知事)

なるほど。その郷土づくりというか、荒れないようにと言うとちょっとネガティブな言い方ですけれども、きちんと農地として守られていくということのある意味でいうと主眼に置いてやっていきたいというお話ですね。

(橋本)

はい。

(知事)

分かりました。ありがとうございます。

すみません。少し延長してしまいました。これで終わりにしたいと思いますが、どうしても一言これをおきたいという方、国広さんは大丈夫ですか。三好さんは、何かありますか。

(三 好)

こういう田舎でアーティストとして活動させてもらっているのですが、やっぱり簡単に行こうと思えば市内やまちへ出てやったほうが機会もいっぱいあるし、チャンスもいっぱいあるし、やりやすいのですが、それでも地域に残ってやりたいことがあると思ったときには、地域でどうにかアーティストとしても芽が出せるような、周りもそういう若い子たちがちゃんと育つような環境になっていったらいいなと思うので、そういうのもよろしくをお願いします。

(知 事)

なるほど。いろいろな場で活躍しようという人たちを応援してほしいという意味ですよね。

(三 好)

そうですね。

(知 事)

分かりました。ありがとうございます。

## 閉 会

(知 事)

それでは、時間もまいりましたので、これで終了とさせていただきたいと思います。

それでは、改めて、本当に今日は皆様こうやってお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございました。

また、貴重な御意見をたくさんいただきました。ときどきテレビカメラが入ると、最初は妙に固かったりするのでありますが、今日は割と円滑に入れたという感じで、一番バッテリーがよかったのかなと思います。本当にこういう積み重ねが大事だと思います。皆さんも是非地区地区で、こういった会というのも変ですが、いろいろなお話し合いをされる機会があったら、私は本当にすばらしいのではないかと考えております。

このいただいたお話は、私はもちろんですが、県庁のスタッフもいっぱい来ておりますし、また県会議員の先生も来ておられますので、ここでしっかりと受けとめて、こ

れからの県政に役立たせていただければと思っております。今日は本当にありがとうございました。

また、傍聴の皆様方も、一番つらいのは傍聴の方々ですよね。2時間ずっと、一言もしゃべらないで御覧になっているというのは結構大変だと思うのですが、お疲れだと思いますけれども、本当にありがとうございました。

それでは、これをもちまして終了とさせていただきます。本当にありがとうございました。